

知的障害養護学校に在学する児童生徒の家庭・地域での生活に関する基礎研究

武蔵博文・高野喜一*・七澤邦彦**・高畑庄蔵**

(2001年10月1日受理)

Research on Daily Family and Community Life of Children Enrolled in Special School for Mental Handicap

Hirofumi MUSASHI, Kiichi TAKANO,
Kunihiko NANASAWA, Shozo TAKAHATA

E-mail: musashi@edu.toyama-u.ac.jp

キーワード：知的障害、ノーマライゼーション、生活の質、地域に根ざした支援

Key words : Mental Handicap, Normalization, Quality of Life, Community referenced Support

はじめに

近年、障害のある人への援助は大きく変わりつつある。我が国では、1993（平成5）年に、障害のある人の自立と社会参加を促進する目的で、「心身障害者対策基本法」が「障害者基本法」に改められた。さらに1995（平成7）年には、「障害者プラン～ノーマライゼーション7か年戦略～」が策定された。それには、①地域で共に生活するために、②社会的自立を促進するために、③バリアフリー化を促進するために、④生活の質の向上を目指して、⑤安全な暮らしを確保するために、⑥心のバリアを取り除くために、⑦我が国にふさわしい国際協力・交流を、という7つの重点施策が示されている。障害者プランは本年度で6年目となり、施策を具体化するだけでなく、実行された内容を検証する時期となった。今後は、様々な障害のある人がそれぞれのニーズに応じて、地域の中で生涯に渡って生活していくための支援が重要になっている。

こうした変化の中で、臼井・今井・和田・須藤・鹿野（1998）は、障害者地域療育等支援事業の対象者にアンケートを実施した結果、地域資源を活用してボランティア等の援助を受けながら、ネットワークを構築していくことが危急の課題であるとした。また、山崎（2001）は、障害者の青年学級について調査を行い、仲間が安心できる居場所（空間）の保障とともに、障害者－家族－地域社会を結ぶ結節点として機能していることを示した。田中（2001）は、養護学校の保護者の意識調査、地域生活支援センターの巡回相談の報告から、学齢期の障害児の多様なニーズに応じる発達支援サービスの現状と課題について報告した。このように、障害者が地域で支援を受けながら生活していくためには、そのニーズを把握して地域生活の実状を明らかにし、どのような生活援助・支援が求められているのかを探っていく試みを積み重ねることが大切である。

武蔵・高畑・平野・安達（1996）は、富山県内の養護学校を卒業した知的障害者を対象に、「知

* 富山大学教育学部附属養護学校平成12年度PTA会長

** 富山大学教育学部附属養護学校

Table 1 「家庭・地域生活実態アンケート調査」の調査項目

1.本人について	1.1.性別 1.2.年齢 1.3.住居形態 1.4.起床・就寝時刻、登校・帰宅時刻 1.5.現在の本人の様子 1.6.おこづかい、金銭管理
2.身体の様子について	2.1.現在の身長・体重 2.2.食事習慣 2.3.間食(時間、内容、量) 2.4.現在の体型、太りすぎの理由・改善意欲 2.5.健康・身体に関する悩み
3.ふだんの家での生活について	3.1.家族と一緒に過ごす時間、過ごし方 3.2.一人で過ごすときの過ごし方 3.3.決まった役割・お手伝い(内容、頻度) 3.4.学校教育で役立っていること
4.休日等の屋外での過ごし方について	4.1.休日に屋外での過ごし方 4.2.長期休業時の屋外での過ごし方 4.3.青年学級・サークル活動への参加、不参加の理由 4.4.友人関係 4.5.友人関係での悩み 4.6.休日に友達同士で出かける場所
5.地域活動・スポーツについて	5.1.習い事(内容、頻度) 5.2.地域行事への参加 5.3.運動・スポーツ習慣(内容、頻度) 5.4.運動・スポーツの必要性、意欲 5.5.運動・スポーツに関する要望
6.将来について	6.1.今後の生活 6.2.今後の生活についての要望 6.3.保護者の相談相手
*このアンケートについての意見	

的障害者の地域生活援助のための生活実態調査」を実施し報告した(武蔵・高畑・平野・安達,1997a; 高畑・武蔵,1997; 武蔵・高畑・平野・安達,1997b)。この調査の結果から、食事習慣、運動・スポーツでの問題や、家庭内の位置づけ・役割、社会参加や地域資源の活用の現状が明らかとなった。今後は、養護学校に在学中の児童生徒を対象に、検討を進めることが求められる。

本研究は、武蔵ら(1996)に続く調査研究として計画されたものである。

目 的

富山県内の知的障害養護学校の小学部、中学部、高等部に在学する児童生徒の家庭と地域での生活実態を探ることをねらいとして「家庭・地域生活実態アンケート調査」を実施した。本報告では、アンケート調査の作成、調査の実施、調査結果の概要について報告する。

アンケート調査の作成

武蔵・高畑・平野・安達(1996)は、知的障害養護学校の卒業生を対象に、地域生活の実態調査を実施し報告した。この調査では、それまでの先行する調査研究を概観して、調査内容・項目を選定しており、知的障害者の地域生活に関する調査としての有効性は高い。また、18歳から46歳までの総数281名、男性190名、女性91名から回答を得ており、富山県内という一地域ではあるが、十分なデータ数を確保している。

そこで、武蔵ら(1996)の調査の観点や内容を生かし、養護学校に在学する児童生徒に合わせて、調査項目の一部を改変することにより、本研究のアンケート調査を作成することとした。

1. 本調査研究の観点

本調査研究のねらいは、養護学校に在学している児童生徒が、学校以外の生活の場である家庭や地域の中で、実際にどのような生活を送っている

かを明らかにすることである。武蔵ら（1996）が行ったアンケート調査の観点との共通性を考慮して次のようにした。

第一に、本人の健康状態とそれに関連する内容（健康への意識、食事習慣、運動習慣、運動への意識）を取り上げた。間食等の習慣、実際に取り組んでいる運動や運動への希望・意欲まで、総合的に捉えることに努めた。

第二に、家庭生活の中での本人の位置づけと役割について取り上げた。家族と過ごす時間と内容、一人で過ごす時間と内容、お手伝いの内容と理由を具体的に取り上げ、家庭生活での姿を探ることとした。

第三に、本人の地域の中での活動の実態と関わり方について取り上げた。友人関係等の個別的人际关系、青年学級や地域行事等のコミュニティ・社会参加、地域の社会資源の活用という点から捉え、地域の中でのネットワークの有様を明らかにすることを意図した。

2. 調査内容・項目の選定

武蔵ら（1996）のアンケート調査項目をもとに、その調査研究の結果に基づいて項目の一部を改変し、Table 1 に示すように6大項目、28中項目にまとめた。選定に当たっては、次のような点を考慮した。

- ・地域の中での活動に関して、兄弟姉妹との関係の設問を削除した。一人っ子から多くの兄弟がいる場合までケースがまちまちであり、兄弟姉妹との関係が家庭や地域の中での活動と必ずしも関連しないためである。
- ・地域の中での活動に関して、本人自身の考えや希望に関する設問を削除した。今回の調査対象が小学部の児童を含む学齢児であり、本人が自分で回答することに無理があると考えたからである。
- ・その代わりに、友人関係の有無に加えて、友人関係の内容を具体的に問う設問を付け加えた。武蔵ら（1996）では、そうした設問がないため、友人との関わり方がどのようなものか判断し難かった。
- ・コミュニティ・社会参加に関して、青年学級に

加えて、音楽バンドのような本人のサークル活動についての設問を新たに設けた。山崎（2001）が指摘するように、今後、本人中心のサークル活動が、地域の中の余暇活用・本人ネットワークとして重要な役割を担う可能性があり、調査内容に加えることは意義がある。

- ・対象児の家庭や地域での生活は、対象児の年齢や地域の状況だけでなく、本人のもつ能力や特性にも左右される。そこで、本人の様子についての設問を新たに設けた。生活する上で必要な力を評価することを目的としたS-M社会生活能力検査（三木安正監修、旭学園教育研究所・日本心理適性研究所著、日本文化科学社発行）を利用した。S-M社会生活能力検査は、I段階（6ヶ月～2歳）からVII段階（10歳半以上）まで130項目から成っている。アンケートで記入するための簡便さを考えて、各段階から2ないし3項目ずつ、以下の18項目を任意に選んだ。ただし、保護者がそれぞれの判断で評価すること、一部の項目でしかないことから、あくまで対象児の様子を知るための目安である。

選んだ項目は以下の18項目である。I段階（6ヶ月～2歳）；①名前を呼ばれるとわかる、②簡単な指示がわかる。II段階（～3歳半）；③日常の挨拶をする、④自分の姓と名がわかる、⑤見たり聞いたことを自分から話せる。III段階（～5歳）；⑥乗り物や大勢の人の中で、だだをこねない、⑦電話で簡単な応対をする、⑧数字やひらがなを拾い読みする。IV段階（～6歳半）；⑨1時間ぐらいなら一人で留守番する、⑩先生からの伝言を伝えられる、⑪決められた時間に自分で寝ようとする。V段階（～8歳半）；⑫人の家で行儀よくしている、⑬本などを買うとき、自分で選べる、⑭時間にあわせて計画的に行動する。VI段階（8歳半以上）；⑮目上の人に丁寧な言葉を使える、⑯小遣いを持たせても、無駄使いしない、⑰新聞の記事などを読んで理解する、⑱敬語を正しく使い分けられる。

- ・調査対象が学齢児であることを考慮して、アンケート調査内容の全体に渡って、設問の表現や設問での選択肢を修正した。

以上の検討を経て、資料に示すような56設問か

らなるアンケート調査用紙を作成した。56設問は、
択一選択式27問、複数回答選択式13問、自由記述
式6問、内容を限定した記述式4問、数値記入式
6問から成っている。

アンケート調査の実施

1. 調査対象

富山県内の知的障害養護学校5校（県立にいか
わ養護学校、県立しらとり養護学校、県立高岡養
護学校、県立となみ養護学校、富山大学教育学部
附属養護学校）に、1999年11月現在、在籍してい
た児童生徒の保護者全員を対象とした。対象児童
生徒の総数は550名、小学部児童188名、中学部生
徒140名、高等部生徒222名であった。

2. 調査手続き

アンケート調査を実施するに当たり、富山県知
的障害養護学校PTA連合会の協力を得た。各学
校へのアンケート用紙の発送と回収は、附属養護
学校PTAが中心となり行った。各学校での調査
はそれぞれのPTAを通じて実施した。「お子さ
んの家庭や地域での生活が豊かになることを願っ
て行うものです。」「お子さんの今の状況、お子
さん本人あるいは保護者の方の考えをお書きくだ
さい。」という調査の主旨を理解してもらおう呼びか

け文とともに、アンケート用紙を家庭に配布した。
各家庭で記入してもらい、後日回収した。アンケ
ート調査の主旨、プライバシーの保護、アンケ
ートの記入方法は、アンケート用紙の1面でも簡単
に説明した。

実施時期は、1999年11月から12月であった。

調査結果の概要

1. 回収状況

対象児童生徒の保護者469名から回答を得た。
Fig. 1に示すように、小学部児童168名（内、男
子131名、女子37名）、中学部生徒117名（内、男
子79名、女子38名）、高等部生徒184名（内、男
子125名、女子58名、不明1名）であった。回収率
は全体で85.3%、小学部児童89.4%、中学部生徒
83.6%、高等部生徒82.9%であった。どの学部
についても、8割を越えるアンケートを回収するこ
とができた。

2. 調査結果の概況

アンケート調査の結果から、回答者（対象児童
生徒と保護者）の全体像を、現在の居住形態、対
象児の様子、将来の生活についての考え、今後の
生活についての要望、保護者の相談相手という点
からまとめた。なお、設問により無回答があり、

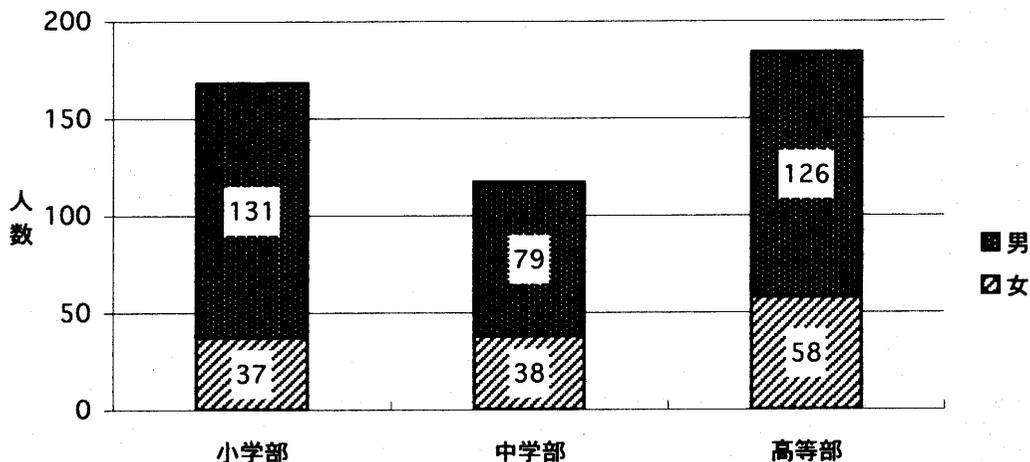


Fig. 1 回答者の構成

回答者数の合計が異なったので、設問ごとの回答者数を示すようにした。

1) 現在の居住形態

回答者の現在の居住形態を学部段階ごとにFig. 2に示した。回答した465名の内、自宅から通学している者81.9% (381名)、学校の寄宿舎に入舎している者9.7% (45名)、施設より通学している者7.7% (36名)、その他0.6% (3名)であった。

学部別にみると、小学部段階では、回答した167名の内、自宅から通学している者が94.6% (158名)を占めた。学校の寄宿舎に入舎している者は1.2% (2名)、施設に入所している者は4.2% (7名)にすぎず、施設に入所して通学している者が若干多かった。この段階では、大部分の児童が地域で家族と生活していることがわかる。

中学部段階になると、回答した114名の内、自宅から通学している者は78.9% (90名)となった。学校の寄宿舎に入舎している者が13.2% (15名)、施設に入所している者が7.9% (9名)であり、寄宿舎に入舎している者の数が増えた。この段階ですでに、2割以上の生徒が家庭や地域を離れ、寄宿舎や施設での指導を受けながら生活していることがわかる。

高等部段階になると、この傾向はさらにはっきりとした。回答した184名の内、自宅から通学している者は72.3% (133名)となった。学校の寄宿

舎に入舎している者が15.2% (28名)、施設に入所している者が10.9% (20名)であり、それぞれ全体の1割を上まわった。高等部生徒の1/4以上が家庭や地域を離れて生活していた。また、期間を決めて寄宿舎に入舎している(例えば、1学期間のみ、冬期のみ)という回答もあったが、今回は、主な居住形態として自宅に含めてまとめた。こうした期間を限った利用を考えると、学校の寄宿舎に入舎している者の数はさらに増える。「その他」と回答した者は1.6% (3名)で、母子寮1名、記載なし2名であった。

2) 現在の対象児の様子

現在の対象児童生徒の様子を、学部段階ごとにFig. 3にまとめた。各学部の対象児童生徒の発達段階を大まかに知ることができた。

小学部段階では、①、②は8割を越える児童が該当したが、③、④では半数の児童となり、⑤以降は該当する児童の数が少なくなった。その内、⑥、⑧、⑬についてはおよそ1/3児童が該当した。小学部では、I段階(～2歳)・II段階(～3歳半)の児童が多いと考えられる。

中学部段階では、①、②、④は8割を越える生徒が該当した。③、⑥、⑧、⑨で半数の生徒となったが、⑬までは、ほぼ1/3の生徒が該当した。中学部には、II段階からV段階(～8歳半)まで、かなりの個人差がある生徒がいると考えられる。

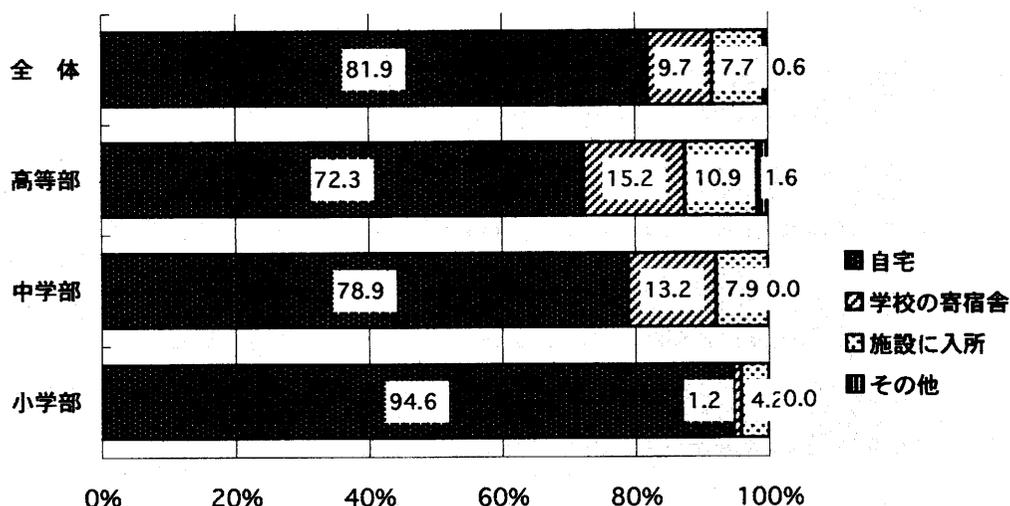


Fig. 2 現在の居住形態

高等部段階では、①から④、⑥、⑧、⑨はほぼ8割を越える生徒が該当した。⑬までは、半数の生徒が該当し、⑭、⑯についても1/3以上の生徒が該当した。高等部には、Ⅲ段階（～5歳）からⅤ段階の生徒を中心として、Ⅵ段階（8歳半以上）のかなり能力の高い生徒がいる一方で、数は少ないがⅠ段階・Ⅱ段階の未発達未分化の状態である生徒もいると考えられる。

3) 将来の生活についての考え

回答者の将来の生活についての考えを、学部段階ごとにFig. 4にまとめた。回答した448名の内、将来も保護者や家族と一緒に生活させたいと考えている者36.8%（165名）、独立して生活してほしいと考えている者13.8%（62名）、グループホーム等で生活してほしいと考えている者10.0%（45名）、施設への入所を考えている者10.5%（47名）、何とも言えない27.7%（124名）であった。「その他」

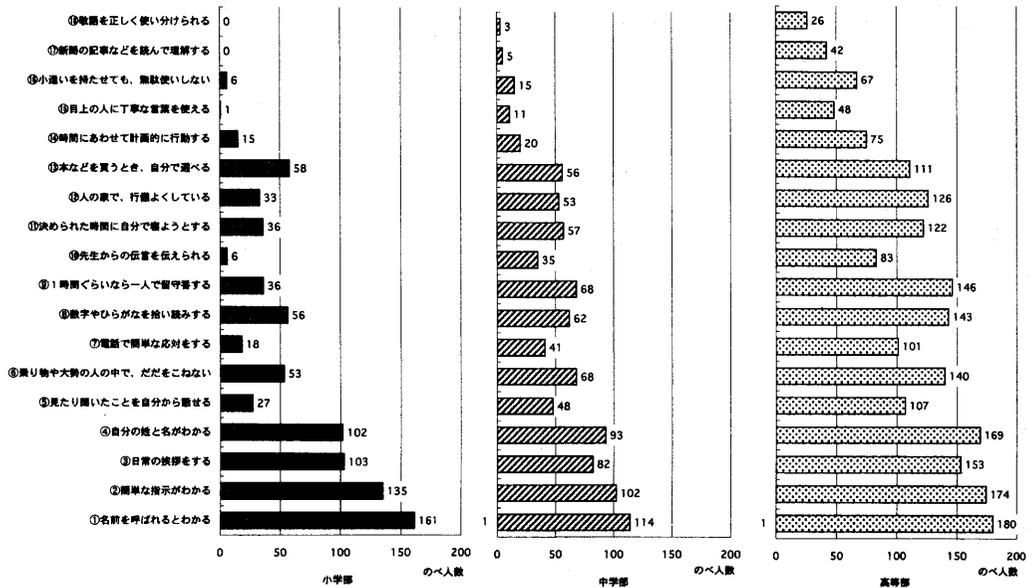


Fig. 3 現在の対象児の様子

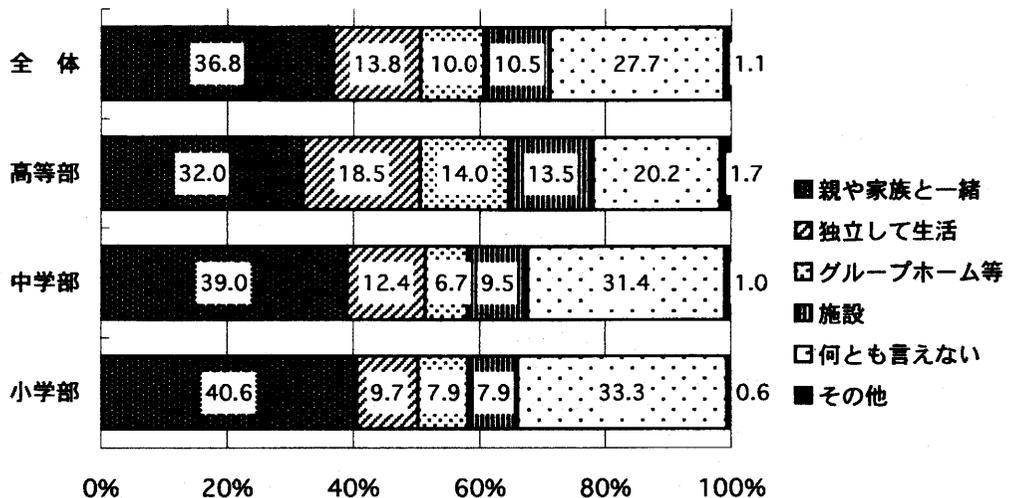


Fig. 4 将来の生活についての考え

という回答は1.1% (5名)であった。

学部別に見ると、回答したものは、小学部165名、中学部105名、高等部178名であった。小学部、中学部段階では、保護者や家族と一緒に生活させたいと考えている者が多く、小学部で40.6% (67名)、中学部で39.0% (41名)であった。その一方で、独立しての生活 (小学部9.7%, 16名; 中学部12.4%, 13名)、グループホーム等での生活 (小学部7.9%, 13名; 中学部6.7%, 7名)、施設への入所 (小学部7.9%, 13名; 中学部9.5%, 10名)はいずれも、1割程度かそれ以下であった。また、「何とも言えない」という回答は、それぞれの1/3を越えており、小学部で33.3% (55名)、中学部で31.4% (33名)であった。将来の生活について十分なイメージ・考えを持っている者は少なく、今の生活を続けていくことが、もっとも具体的な将来の生活の姿となっていることがわかる。「その他」という回答は、小学部で0.6% (1名)、中学部で1.0% (1名)で、「在宅でヘルパーをお願いする」1名、記載なし1名であった。

高等部段階になると、保護者や家族と一緒に生活させたいと考える者が減少し、32.0% (57名)となった。その一方で、独立して生活してほしいと考えている者18.5% (33名)、グループホーム等で生活してほしいと考えている者14.0% (25名)、施設への入所を考えている者13.5% (24名)といずれも増加した。また、「何とも言えない」という回答も20.2% (36名)に減少した。養護学校卒業を控えて、将来の生活を様々に模索している様子が伺えた。「その他」という回答は1.7% (3名)で、「生活の土台作りをしてから」1名、記載なし2名であった。

4) 今後の生活についての要望

今後の生活への要望について自由記述で回答を求め、学部ごとにまとめて、小学部をTable 2, 中学部をTable 3, 高等部をTable 4に示した。重複した内容はまとめたが、なるべく原文の意図を生かすように整理した。

小学部段階では、26.8% (45名)から回答を得た。学校への要望、職場や働くことに関する要望、地域生活への要望が多く出された。学校への要望では、食事や着替え、挨拶等の基本的な生活習慣

Table 2 今後の生活への要望 (小学部)

小学部の回答者数	45
社会の理解に関する要望	
障害者が特別視されない社会になればよい(同4)。 障害への理解を深めてほしい(同様意見3)。 親なき後、安心して生活できる社会になってほしい。	
施設等に関する要望	
施設を増やしてほしい(同4)。	
生活ホームやグループホームに関する要望	
県内にグループホームを作ってほしい(同2)。	
学校への要望	
料理等の社会生活に必要な学習を望む(同3)。 身辺自立について引き続き指導してほしい。 自立訓練の場を早くから与えてほしい(同2)。 学校にいる時間を長くしてほしい(同2)。 学校での学童保育を増やしてほしい。 学校まで遠く不便。近いところがあればよい。	
職場や働くことに関する要望	
通所できるところを増やしてほしい(同2)。 働けるところがたくさんあってほしい。 作業所がたくさんできればよい。 可能性に応じて就職の受け皿を広げてほしい。 地域に支援センターがほしい。 福祉工場がほしい。	
行政等に関する要望	
親なき後が不安。相談できる方がほしい(同3)。 どんな障害程度でも対応できるシステムがほしい。 言葉だけでなく親身になって相談に応じてほしい。	
地域生活への要望	
帰宅後に遊んだり勉強するところがほしい(同2)。 障害者が気軽に行ける場所、施設がほしい(同2)。 家庭等に出向いてくれるサービスを充実してほしい。 親でも学校でもなく、過ごせる機会がほしい。 長期の休みに参加できる行事があったらよい。 ボランティアなどを充実させてほしい。 HPやEメールを活用できるようになるとよい。 希望することがすぐに行える状態であってほしい。	
将来の生活へ向けての要望	
気の合う仲間と一緒に暮らせたらよい。 いろいろなことに挑戦させたい。 一目で障害と分かるので、兄弟が大変。	

の指導から、調理や掃除、洗濯等の社会生活に必要な技能の指導についての要望が多かった。また、「学校にいる時間を長くしてほしい。」「学校までが遠くて不便。」といった学校の運営や学区に関する意見も出された。地域生活への要望では、「帰宅後に遊んだり、勉強するところ」「気軽に行ける場所、施設」「親でも学校でもない方の支援で過ごせる機会」「長期の休みに参加できる行事」等のように、障害者でも利用できる地域の社会資源の充実や活用についての意見が出された。

中学部段階では、24.8% (29名)から回答を得た。施設等に関する要望、学校への要望、職場や働くことに関する要望、行政等に関する要望等に

Table 3 今後の生活への要望（中学部）

中学部の回答者数	29
社会の理解に関する要望	
社会の中に入れる環境がほしい。	
障害への理解を深めてほしい。	
社会が、障害者の雇用をもっと理解してほしい。	
施設等に関する要望	
施設を増やしてほしい(同様意見2)。	
ショートステイを増やしてほしい。	
生活ホームやグループホームに関する要望	
安心して生活するグループホームがあればよい。	
学校への要望	
うわべでなく、理解し合える交流をしてほしい。	
もっとその子供ひとり一人を理解してほしい。	
自立へ向けて教育してほしい。	
食事のマナー・自立・あいさつ。	
親から離れて宿泊する機会を多くしてほしい。	
職場や働くことに関する要望	
子どもにあった作業所が選択できるとよい(同2)。	
通所施設を充実・増やしてほしい(同2)。	
働けるところがたくさんあってほしい。	
重度の子でも毎日通所できるところがほしい。	
安定して働く場がほしい。	
行政等に関する要望	
相談場所が分からない。	
介護保険のように障害に合ったサービスがほしい。	
身体と知的障害の差をなくしてほしい。	
作業所や施設をチェックする機関があればよい。	
卒業後のしっかりした援護体制。	
地域生活への要望	
卒業後も集える場所を設けてほしい。	
地域で仲間と楽しく過ごせたらよい(同2)。	
子供を預かってくれる場所があればよい。	
将来の生活へ向けての要望	
根気強さを養い、技術を身につけさせたい。	
障害者の参加できることがふえてほしい。	
社会自立のための協力体制がほしい。	
本人が選択できるような環境があればよい。	

ついて様々な意見が出された。施設等に関する要望では、ショートステイの充実がある。受け入れ施設数、人数枠、期日や受け入れ方について要望が出された。学校への要望では、通常学校との交流活動、一人一人に応じた教育支援、自立へ向けての教育等、現在の障害児教育がまさに課題としていることが指摘された。行政等に関する要望では、卒業後の生活に向けての相談やサービスの改善についてである。多くの保護者が学校教育と福祉サービスの縦割りに苦勞しており、必要な情報やサービスを得られにくい状況がある。

高等部段階では、23.4% (43名) から回答を得た。社会の理解に関する要望、施設等に関する要望、生活ホームやグループホームに関する要望、

Table 4 今後の生活への要望（高等部）

高等部の回答者数	43
社会の理解に関する要望	
障害者とレッテルを貼らず、見守ってほしい(同2)。	
障害者の住みやすい理解のある社会でほしい。	
親なき後、安心して生活できる社会でほしい。	
本人の意思を尊重、社会がもっと理解をしてほしい。	
就職を受け入れてくれる企業が多ければよい。	
施設等に関する要望	
親なき後、受け入れる施設があつてほしい。	
施設に入りたいが無理どそうだ、何とかしてほしい。	
施設を増やしてほしい、定員も増やしてほしい。	
生活ホームやグループホームに関する要望	
グループホームが増えてほしい(同4)。	
安心して友人と暮らせるホームがほしい。	
学校への要望	
もう少し早く現場実習をさせてほしい。	
在学中に自立訓練の機会があればよい。	
教育機関の考えが古い。	
職場や働くことに関する要望	
作業所を増やしてほしい(同4)。	
働けるところを増やしてほしい(同3)。	
仕事など独立して生活できるようにしたい。	
劣等感の差別ない職場がよい。	
地域に根ざした作業所がほしい。	
通所でも送迎を考慮してほしい。	
行政等に関する要望	
親なき後の生活のモデルを提示してほしい(同3)。	
障害者に理解のある医療機関を充実してほしい。	
国や自治体が入所施設をもっと作ってほしい。	
人の援助を充実してほしい。	
障害者を理解したよき介護者を育成してほしい。	
地域生活への要望	
ボランティアを気軽にお願いできる機関がほしい。	
卒業後に、社会参加できる機会を増やしてほしい。	
学校の休み時に、参加できる行事があればよい。	
将来の生活へ向けての要望	
個性に合わせて自分の考えをもってほしい。	
二人暮らしをさせたい。	
親がもっと行動すべき。	

職場や働くことに関する要望、行政等に関する要望が多く出された。社会の理解に関する要望では、学校卒業後の生活を見据えて、「レッテルを貼らずに見守ってほしい。」「住みやすい理解のある社会であってほしい。」「安心して生活できる社会であってほしい。」「本人の意思を尊重してほしい。」等の意見が出された。生活ホームやグループホームに関する要望では、県内ではまだ少ないグループホームの充実を求める意見が多く、仲間同士の少人数で、安心して暮らせるホームを実現することが急がれる。職場や働くことに関する要望では、働くところの確保、作業所の増築・増員を求める意見が、回答を寄せた者の全体の1/4にも上った。社会全体に障害者を受け入れてくれる企業や場所を求めるように働きかけるべきだという意見もあった。行政等に関する要望では、親なき後の生活モデル、障害者に理解のある医療機関の充実、

親に代わるよき介助者の育成等を求める意見が出された。

5) 保護者の相談相手

保護者の相談相手の有無をFig. 5に、その相談相手を複数回答でFig. 6に、学部段階ごとにまとめた。回答した440名の内、相談相手がいる者363名(82.5%)、いない者77名(17.5%)であった。相談相手としては、学校の先生、学校の保護者同士が非常に多く、次いで、親類・縁者であった。

学部別に見ると、小学部段階では、回答した157名の内、相談相手がいる者が87.3%(137名)と9

割近くであった。相談相手としては、学校の先生(「いる」と回答した者の75.9%, 104名)、学校の保護者同士(79.6%, 109名)が大半を占めていた。「その他」という回答は9.5%(13名)で、保護者の知人・友人4名、専門家・病院の担当医3名、学校外の障害児をもつ保護者2名であり、保護者のサークル仲間、通園時代の先生、家族同士が各1名、記載なし1名であった。

中学部段階になると、回答した115名の内、相談相手がいる者が83.5%(96名)であった。相談相手としては、学校の先生(「いる」と回答した

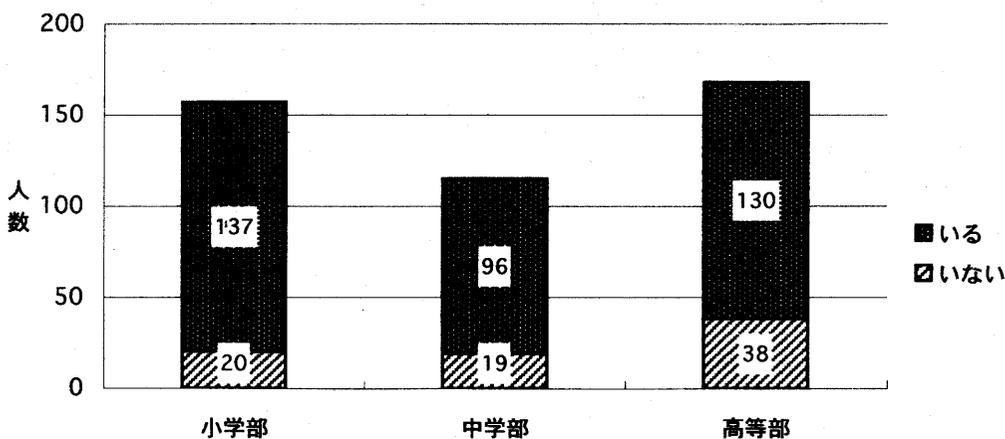


Fig. 5 保護者の相談相手の有無

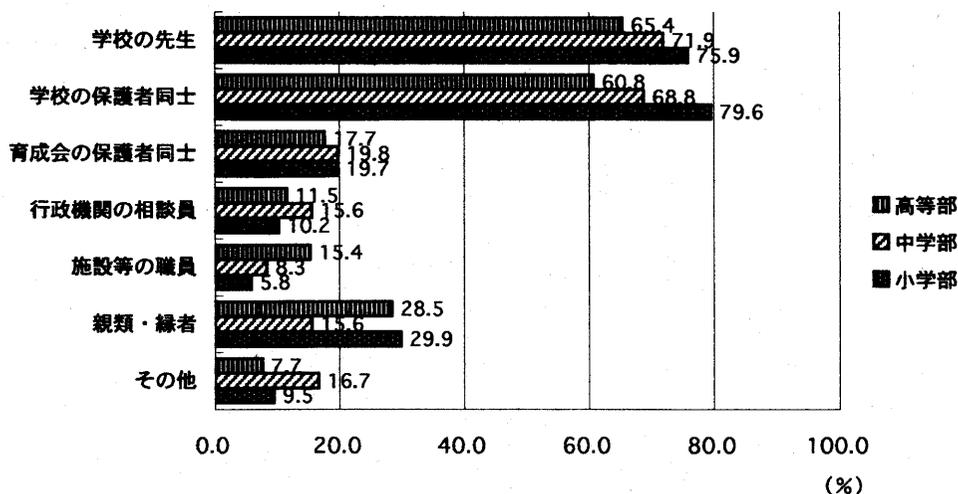


Fig. 6 保護者の相談相手

者の71.9%、69名)、学校の保護者同士(68.8%、66名)であった。相談相手がいるという回答が減少し、相談相手として、学校の先生、保護者同士の占める割合も減少した。「その他」という回答は16.7%(16名)で、保護者の知人・友人7名、保護者のサークル仲間2名であり、病院の担当医、コーディネータが各1名、記載なし5名であった。

高等部段階になると、回答した168名の内、相談相手がいる者が77.4%(130名)となった。相談相手としては、学校の先生(「いる」と回答した者の65.4%、85名)、学校の保護者同士(60.8%、79名)であった。相談相手がいるという回答も、相談相手として学校の先生、保護者同士をあげる割合もさらに減少した。その一方で、相談相手として、施設等の職員(15.4%、20名)、親類・縁者(28.5%、37名)をあげる者が増えている。「その他」という回答は7.7%(10名)で、保護者の知人・友人3名、家族同士3名であり、病院の担当医、近所の同級生の保護者が各1名、記載なし2名であった。

考察・まとめ

富山県内の知的障害養護学校の小学部、中学部、高等部に在学する児童生徒が、学校以外の生活の場である、家庭や地域の中で、実際にどのような生活を送っているかを明らかにすることをねらいとして、「家庭・地域生活実態アンケート調査」を作成・実施した。アンケート調査は、武蔵ら(1996)の調査の観点や内容を生かし、養護学校に在学する児童生徒に合わせて、調査項目の一部を改変することにより作成した。

今回の報告では、アンケート調査の結果から、回答者(対象児童生徒と保護者)の全体像をまとめた。現在の居住形態、対象児の様子、将来・今後の生活、保護者の相談相手について考察する。

1. 現在の居住形態

中学部段階で全体の2割以上、高等部段階で1/4を越える生徒が、家庭・地域を離れて学校の寄宿舎や施設で生活している現状であった。寄宿舎や施設への入所理由は明らかではないが、通学

困難、家庭の事情、本人の障害に加えて、社会自立のための経験等が考えられる。こうした児童生徒の在学中の生活実態が卒業後の生活にも影響を及ぼしていることは十分に考えられる。卒業後の生活という視点から、寄宿舎・施設での生活と養護学校教育との関係を検討し直して見る必要があるであろう。武蔵ら(1996)では、回答を寄せた者の8割以上が卒業後も自宅で家族と暮らしていた。これは、自宅で家族と暮らしていた者ほど、調査への回答を寄せやすかったことの流れかもしれない。在学中からの追跡研究により、卒業後の生活への移行の過程を明らかにする必要がある。

2. 対象児の様子

養護学校の各学部に在学している児童生徒の様子を大まかに把握することができた。予想されたことではあるが、とくに中学部、高等部にかなり個人差がある生徒が在学していることが示された。今回の報告では、調査結果を学部ごとに整理してまとめたが、対象児童生徒の実態の様子により、家庭・地域生活の実状や課題を検討することも必要である。

対象児の様子を把握するための項目は、S-M社会生活能力調査の各段階から、保護者でも評価しやすいと考えられた項目を任意に抽出した。同じ段階にあっても抽出した項目により、児童生徒の達成度によりばらつきがあった。生活経験により達成しやすい項目とそうでないものがあると考えられる。項目の抽出・評価の妥当性を検討することは今後の課題である。

3. 将来・今後の生活について

小学部、中学部の段階では、将来の生活を見通すことは難しく、そこまで余裕がないという現状であった。施設を希望する者は少ないが、将来、利用できる生活資源についての十分な情報も得られていない状況であろう。今後の生活についての要望も、基本的な生活習慣や社会生活に関する学校での指導のこと、地域で利用できる場所の確保等のように、現在の学校・地域生活に関わる内容が多くあげられた。その内容の多くは、現在の教育・福祉・行政の課題であり、障害児本人・保護者の

実際のニーズの表れともいえる。

高等部の段階では、卒業後の進路選択とも関係して、将来の生活の見方も多様になった。「独立して生活する」「グループホーム等で生活する」が「施設へ入所する」より増えていることは注目に値する。今後の生活についての要望でも、グループホームでの生活、職場や働くこと、親なき後の生活の保障等のように、卒業後も地域で生活することを基にした要望が多く出された。これらの要望の多くは、個人や家族の努力で解決できる範囲を越えており、行政や援助サービスに関わる者がともに改善をめざして、チャレンジしなくてはならない課題ばかりである。

4. 保護者の相談相手

学部を経るにしたがい、相談相手がいないという回答が増え、相談相手として学校の先生、学校の保護者同士の割合が減少した。これまでの結果に示したように、学部があがるごとに、居住形態も多様になり、将来・今後の生活に対する要望も、学校卒業後の地域生活に向けて多岐にわたってきた。こうした現実のニーズに、学校の先生や保護者同士だけでは対応仕切れるわけもなく、また、それに代わる相談体制も地域の中に十分でないといえる。家族内だけ、ごく近い親類・縁者をたよりにしていく過程が見てとれる。

「障害者プラン」の具体化が図れる中で、障害者の地域生活を支援する様々な事業が、地域療育支援、ホームヘルプサービス、デイサービス、相談支援事業などとして実施されてきている。しかしながら、今回のアンケート結果は、未だ、十分な対応ができるまでに到っていないことを示した。学校卒業後に向け、地域で生活をしていく中で、どのような援助・相談体制が望まれているのかをさらに追求する必要がある。

以上、アンケート調査の結果から、回答者（対象児童生徒と保護者）の全体像について報告した。今後は、今回報告できなかった身体の様子、普段の家での生活、休日の過ごし方、地域活動・社会資源の利用、運動・スポーツ等について順次報告していきたい。

謝 辞

アンケート調査の実施には、富山県知的障害養護学校PTA連合会に多大な協力を得た。改めて感謝したい。

文 献

- 武蔵博文・高畑庄蔵・平野道子・安達勇作（1996）知的障害者の地域生活援助に関する基礎研究 富山大学教育学部紀要A（文科系）第48号，99-110.
- 武蔵博文・高畑庄蔵・平野道子・安達勇作（1997a）知的障害者の家庭生活に関する基礎研究 富山大学教育学部紀要A（文科系）第49号，43-50.
- 武蔵博文・高畑庄蔵・平野道子・安達勇作（1997b）知的障害者の社会生活に関する基礎研究 富山大学教育学部紀要A（文科系）第51号，15-25.
- 高畑庄蔵・武蔵博文（1997）知的障害者の地域生活支援に関する基礎研究—食生活，運動・スポーツ等の現状および本人・保護者のニーズの分析 発達障害学研究，19，3，235-244.
- 田中齋（2001）学齢期の放課後，長期休暇時の地域サービス—地域療育等支援事業からみたニーズと実状 発達障害研究，23，2，77-84.
- 臼井真澄・今井幸一・和田真一・須藤哲・鹿野智子（1998）地域療育等支援事業へのニーズから地域福祉を考える—とくにニーズ調査から見えてきたこと— 発達障害研究，20，1，25-34.
- 山崎由可里（2001）地域・家庭・仲間たちをつなぐ結節点としての青年学級「すばらしき仲間たち」—生活調査をもとにして 障害者問題研究，29，1，24-32.

付 記

このアンケート調査の一部は、平成12年度全国国立大学附属学校園関東・北信越・東海地区PTA研修会で報告した。

家庭・地域生活実態アンケート調査

アンケートの記入について

- このアンケートは、皆様の家庭や地域での生活がさらに豊かになることを願って行っているものです。お子様の今の状況、お子様本人あるいは保護者の方の考えをお書き頂けると幸いです。
- アンケートの結果は統計的に処理致しますので、皆様にご迷惑をおかけすることとは決してございません。
- 所用時間は、15分～20分程度です。
- 選択肢「① ② ……」のある設問は、○で囲んでください。記述式の設問は（ ）内にお答えをご自由にお書きください。
- アンケートの結果がまとまりましたら、皆様にご報告致します。

1 お子様について

1	性別	①男	②女	2	年齢 (歳)	・小学部	・中学部	・高等部
3	現在、お子様が住んでいる場所をお聞きます。							
4	起きる時刻、寝る時刻は？	①自宅	②学校の寄宿舎	③施設に入所	④その他 ()			
4	起きる時刻、帰ってくる時刻は？	・起きる時刻 (時頃)	・寝る時刻 (時頃)	出かける時刻、帰ってくる時刻は？	・登校 (時頃)	・帰宅 (時頃)		
5	現在のお子様の様子についてお聞かせください。 あてはまるものを全て選んでください。	<ul style="list-style-type: none"> ①名前を呼ばれるとわかる。 ②「・・・へ行きなさい」などの簡単な指示がわかる。 ③「おはよう」「ありがとう」などの日常の挨拶ができる。 ④自分の姓と名がわかる。 ⑤見たり聞いたりしたことを自分から話せる。 ⑥乗り物の中やおおせいの人の中で、ただをこねたりしない。 ⑦電話で簡単な対応ができる (受話器をとって親に取り次ぐなど) ⑧テレビのチャネルや時計など、数字やひらがなのひろい読みができる。 ⑨1時間ぐらひらひとひとりでも留守番ができる。 ⑩先生からの家への伝言をきちんと伝えられる。 ⑪決められた時間なれば自分寝ようとする。 (「寝なさい」と命令するのではなく、寝る時間を知らせるくらいでできる) ⑫人の家に行ったとき、1時間ぐらひらひら行儀よくしていただける。 ⑬本などを買うとき、自分で適当なものを選ぶ。 ⑭約束の時間を守るとうとするなど、時間に合わせて計画的に行動できる。 ⑮目上の人にはいいねいなことばを使える。 ⑯一度にたくさんのごつかいを持たせてもむだづつかいしない。 ⑰新聞の記事などを読んで理解できる。 ⑱敬語を正しく使い分けられる。 						

6	おこづかいをあげていますか？ ①あげている。 ②あげていない。 おこづかいを「あげている人」にお聞きます。 いくらですか？ ひと月あたり (円位) おこづかいを何に使っていますか？ 思いつくだけお書きください。 () 食料の管理をどのようにしていますか？ ①本人が自分で行う。 ②本人の求めに応じて与える。 ③本人はお金に関心がない。 ④お手伝い等の課題達成に応じて与える。 ⑤その他 ()
---	------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

2 身体の様子について

1	現在の身長と体重は？	・身長(約)	・センチ	・体重(約)	・キロ
2	食事をきちんととっていますか？ ①3食きちんととっている。 ②不規則になりがち… (どんな様子？)				
3	間食(おやつ)をしますか？ ①ほぼ毎日する。 ②時々する。 ③しない。 「間食(おやつ)をする」という方にお聞きます。 ・時間を決めている… ①決めている。 ②いない。 ・量や内容を制限している… ①している。 ②いない 「間食(おやつ)をする」という方にお聞きます。 どのおやつを食べますか？ ・よく食べるもの。具体的に、 _____ …どのくらい _____ … _____ … _____ …				
4	現在の体型をどう思っていますか？ ①太りすぎて困っている。 ②やや太っている。 ③普通だと思う。 ④ややすまじ ⑤やせすぎて困っている。 ⑥特に気にしていない。 「太りすぎ」と思う方に、その理由は？ あてはまるものを全て選んでください。 ①運動する機会が少ないため ②本人の体質のため ③食事を取りすぎたため ④間食を取りすぎたため ⑤病気をしたため ⑥身体を動かすことが好きでないため ⑦その他 ()				

4 休日等の屋外での過ごし方について

(寄宿舎などに入っている方は、帰宅時の様子をお書きください。)

1	休日に家の外で、何をしておこなっていますか？ あてはまるものを全て選んでください。 ①買い物 ②映画 ③ゲームセンター ④ボウリング ⑤自転車でのり ⑥デパートめぐり ⑦公園など遊戯施設 ⑧育成会などの行事 ⑨カラオケボックス ⑩運動・スポーツ () ⑪地域の行事 () ⑫屋外での手伝い () ⑬スイミング ⑭習い事 ⑮親のサークル活動 ⑯障害児対象のキャンプ ⑰学校の行事 ⑱PTAの行事 ⑲その他 ()
2	夏休み、冬休み、春休みに、家の外で、何をしておこなっていますか？ あてはまるものを全て選んでください。 ①買い物 ②映画 ③ゲームセンター ④ボウリング ⑤自転車でのり ⑥デパートめぐり ⑦公園など遊戯施設 ⑧育成会などの行事 ⑨カラオケボックス ⑩運動・スポーツ () ⑪地域の行事 () ⑫屋外での手伝い () ⑬スイミング ⑭習い事 ⑮親のサークル活動 ⑯障害児対象のキャンプ ⑰学校の行事 ⑱PTAの行事 ⑲その他 ()
3	養護学校の卒業生が休日に集う、本人たちのサークル活動、例えば富山市育成会の「みんなの青年の会」をご存知ですか？ ①はい ②いいえ 卒業後に、「みんなの青年の会」のようなサークル活動が地域にあれば、参加させたいですか？ ①はい ②必要に応じて ③いいえ 養護学校の卒業生が休日に集って、音楽活動をする本人のサークル、例えば「ラブバンド」をご存知ですか？ ①はい ②いいえ 卒業後に、「ラブバンド」のような音楽活動をするサークルが地域にあれば、参加させたいですか？ ①はい ②必要に応じて ③いいえ
4	休日等に一緒に遊ぶ友人はいますか？ ①はい ②時々 ③いいえ 「友人がいる」という方、あてはまるものを全て選んでください。 ①学校の友人 ②親のサークル仲間の子ども ③近所の友人 ④親類の子ども ⑤育成会の友人 ⑥その他 ()
5	友人のごことで悩んでいることはありますか？ ()

「太りすぎ」と思われる方に、改善しようとお考えですか？

あてはまるものを全て選んでください。 ①時に考えていない。 ②現状では仕方がない。 ②運動する機会がほしい。 ④食事を控えたい。 ⑤学校に相談している。 ⑥現在、学校と連携して指導中である。 ⑦その他 ()
5 現在、健康や身体のごことで悩んでいることがありますか？ ()

3 ふだんの家での生活について

(寄宿舎などに入っている方は、帰宅時の様子をお書きください。)

1	家族と一緒に何かをして過ごす時間は、家庭の中にありますか？ ①ある (一日あたり 時間くらい) ②あまりない 家族と一緒に、何をしておこなっていますか？ 全て選んでください。 ①テレビ ②ビデオ ③テレビゲーム ④宿題 ⑤器楽演奏 ⑥CD・音楽鑑賞 ⑦カラオケ ⑧お手伝い ⑨運動 () ⑩習い事 ⑪おしゃべり ⑫トランプなどのゲーム ⑬好きなもので遊ぶ () ⑭その他 ()
2	一人で過ごす時に、お子さんは何をしていますか？ あてはまるものを全て選んでください。 ①テレビ ②ビデオ ③テレビゲーム ④宿題 ⑤ごろ寝 ⑥CD・音楽鑑賞 ⑦カラオケ・ダンス ⑧お手伝い () ⑨運動 () ⑩習い事 ⑪裁縫 ⑫トランプなどのゲーム ⑬雑誌・新聞を読む ⑭おもちゃ遊び ⑮器楽演奏 ⑯犬の散歩 ⑰好きなもので遊ぶ () ⑱様々なものづくり () ⑲その他 ()
3	決まった役割(お手伝い)が家庭の中にありますか？ ①はい ②時々 ③いいえ 「はい」「時々」という方に、どんな役割(お手伝い)ですか？ …週当たりの回数 … … … 「いいえ」という方に、その理由は？ あてはまるものを全て選んでください。 ①時に理由はない。 ②逆に手がかかる。 ③木人が疲れているから。 ④何が木人にてきめるか分からない。 ⑤その他 ()
4	学校で習ったことで、家庭で役立っていることはありますか？ ()

